ボトルメール

紫月

https://www.pixiv.net/novel/show.php?id=23100334

ヒュンマ, チウ, 闘志と天使でヒュンマの日

その言葉は　長く旅してきたのでしょう
あなたの元へ　届く日を夢見て
奇跡が起こると　祈るように信じて

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

2024年10月4日から５日にかけて、ヒュンマオンリーwebイベント「闘志と天使の後夜祭」が開催されました。
主催者さま、ご参加の皆さま、いつも本当にありがとうございます。
そこでの公開を目指して書いた話になります。
イベントの開催は大分前に発表されていたので、
参加申し込みの段階では「まだまだ時間もあるし、何か書けるだろう」なんて気楽に構えていたのですが……
直前になっても〝コレ〟という話が思い浮かばず、あれこれ頭を捻って苦労して考えました。
そのうち幾つか用いたいモチーフが浮かんできたものの、それらを上手く料理出来たかどうかは……どうでしょう？
タイトルの「ボトルメール」や作中の〇〇〇〇は当初から思い描いていたモチーフですが、
書いている途中で、「あ、これってもしかしてキューピッドの話かな？」と、
「闘志と天使」に無理やりこじつけることにしたのは、ここだけの

話（笑）。
心の中で付けたサブタイトルは「浪漫を知る男たちの話」。あるいは「濡れネズミの話」（ひどい）。
いつも温かいお声をお寄せ下さる皆さま、支えて下さる皆さま、そして新たにヒュンマファンになられた皆さまに。
少しでも楽しんでいただけたら幸いです。

イメージぴったりの素敵な表紙は、こちらからお借りしました。
illust/86222539

ボトルメール

1

扉の向こうに立っていたのは珍客だった。
しばらく前から、広場の方がやけにざわついているとは思っていた。ネイル村の子どもたちは元気がよい。だから彼らのはしゃぐ声が空高く響き渡るのはいつものことであるのだけれど、今日はそこに、明らかに大人のものである声も混ざっていた。悲鳴や怒号ではないので緊急を要する事態ではなさそうだ。しかし、異変といえば異変である。
様子を見に行った方がいいかしら。
思案しているうちに、何者かの足音がこちらに近付いてくるのが判った。そしてドアの幾分低い位置から、コンコンと二度、ノックの音が聞こえたのである。
訝しみながら外開きの扉を開けた。その陰からひょこりと顔を覗かせたのは——
「チウ！」
「ああ、お会い出来てよかった。お久し振りです、マァムさん」
身長こそ低いものの、いかにもパワーがありそうな、がっしりとした体躯。全身を固そうな毛に被われた姿は、どこからどう見てもモンスターのものだ。彼がいきなり現れた事情はまるで解らないが、チウの姿を目にした村人たちが驚くのも無理はない(と、マァムは先ほどの騒ぎの原因を理解した)。
それでいて彼らがパニックに陥らなかったのは、チウのくりくりと丸く大きな目が愛嬌のあるものであることに加え、彼が人語を操ることが大きいだろう。
(君たち、ちょっとお尋ねするが、マァムさんのお宅はどちらだね？)
実際に耳にしたわけではない。でも、甲高い声でそんな質問を投げ掛ける彼の様子が目に浮かぶ。

(ボクかい？ボクは彼女の兄弟子さ！)
そんな言葉をどこまで村人が信じたものか。でも少なくともマァムの知り合いであると知れば、ある程度警戒心を和らげてくれたであろうことは想像がついた。
(あちらかい？ありがとう。世話になったねえ)
「驚いたわ。本当に久し振りね。今日は一体、どうしたの？」
「突然すみません。お渡ししたいものがあったものですから」
見ればチウは、背中に茶色い袋を背負っている。何を持ってきてくれたものか判らなかったが、
「とりあえず入って」
マァムは一歩引くと、彼を屋内へ招き入れようとした。
だが、チウはすぐには動かない。
「マァムさん、すみません。お邪魔する前に、パピィに水をあげたいのですが」
「パピィ？」
「はい。ボクを運んでデルムリン島からここまで飛んでくれたので……実はここに来る前に、老師のところへも寄ったんですよ。だから、大分疲れているんです」
その言葉で思い出した。確か、チウが〝獣王遊撃隊〟として集めたモンスターの中にパピラスがおり、それを彼はパピィと呼んでいたはずである。なるほど、自ら遠距離を移動する術を持たないチウは、パピラスの力を借りてここまでやってきたというわけか。
背後を見遣ったチウの視線を追えば、庭の片隅に翼をたたんだパピラスが立っているのが見えた。立っているとはいっても、頭を力なく落とし、ぐったりした様子である。ラインリバーがデルムリン島から最も近い大陸であるとはいえ、船で何日も掛かる距離を飛んでくるとなれば、その疲労は相当なものだろう。
「待っていて。すぐにお水を持っていくわ」
室内にとって返したマァムは、調理用の一番大きなボウルにたっぷりと水を入れて戻った。入り口の戸を押さえて待っていたチウと共に、パピラスのところへ急ぐ。
「ほら、パピィ。マァムさんがお水を下さったぞ。これを飲んでゆっくりしているといい」

チウが語り掛ければ、パピラスは大きく口を開いてクワアァァと返事をした。
「お腹は空いていないのかしら」
「大丈夫でしょう。パピィは、数日に一回の食事で充分なんです。昨日出発する前にしっかり食べていましたから……パピィ。悪いがボクは、これからマァムさんにお話がある。水を飲んだら昼寝していてもいいし、どこか近場を飛んできてもいいぞ。ただし、付近の皆さんを驚かせないように気を付けろよ」
パピラスの肩に労るように手を置いたチウに対し、従順な部下は大きくひとつ、こくりと頷いた。

「それで、私に渡したいものって？」
改めて再会の挨拶を済ませ、チウとレイラを互いに紹介し(『さすがマァムさんのお母上、マァムさんと同じくお美しい！』)、ダイニングテーブルでお茶を飲みながら近況報告をして、ようやくマァムはそう切り出した。言いながら、すでに空っぽになったチウの皿に、とりわけ大きく切ったケーキを一切れ追加する。ナッツのざくざくとした感触が楽しい素朴な味わいのケーキは、レイラの作ったものだ。(『お母上はお美しいだけでなく、お料理の腕も素晴らしいですね！』)
「わ、ありがとうございます！こんなにたくさんいただいちゃって、いいんですか？」
「いいのよ。あなたも長旅でお腹が空いたでしょう……ここに来る前には老師のところへ寄ったって言っていたけれど？」
「ええ。ロモスに来るのに師に挨拶しないなど、弟子としてありえないですからね」
大きなケーキを両手で掴んで頬張りながら、チウは答える。皿の脇にはフォークが置かれていたが、慣れない道具に悪戦苦闘する様子を見て、無理はしないでいいとマァムが言ったのだ。
「そう。老師はお元気だった？」
「うーん。相変わらず、よく解らない持病のことを仰ってはいましたが。しかしボクが見たところでは、とてもお元気そうに思えました」

「よかった！安心したわ」
「で、ですね。この後マァムさんに会いに行くのだとお話したところ、これを持っていくようにと言われまして」
言いながらチウは、あっという間にケーキを平らげてしまう。彼が脇に置いた袋をあさっている間に、マァムは次の一切れを再び皿に乗せてやった。
「ありがとうございます……お、これだ」
がさごそやっていたチウは、袋から紙包みを取り出しすと、それをテーブルの上に置いた。
「これは？」
「老師特製のお茶の葉ですよ。マァムさん、お好きだったでしょう？」
「まあ！」
マァムの目が輝く。
彼らの師であるブロキーナはロモスの山奥に住んでいるため、自給自足に近い生活を送っているわけだが、そこでよく煎じている茶があった。幾種かの野草を乾燥させブレンドしたもので苦味も強く、正直に言えばチウはこれが苦手だ。しかし最初の一口を過ぎると苦味の中に仄かな甘味も感じられるようになり、なによりリラックス効果が高く、飲むと身体から無駄な力が抜ける心地がする。ブロキーナの元で修行をしていた折、マァムは師と共に朝夕これを愛飲していた。
「うれしいわ。これを飲むと、身体が内側からすっきりするのよ。武術においてもまだまだ老師には敵わないけれど、このお茶の作り方に関しては絶望的に……教えていただいて試したこともあるんだけれど、どうしても老師が作られるようには出来ないのよね」
「前回差し上げた分がそろそろ切れるころだろうと仰いましてね。それとは別に、今日伺った当初の目的がこれです」
今度は比較的あっさりと、チウは次なる届け物を差し出した。
「これは？」
「デルムリン島のブラスさまからです。毎年作っていらっしゃる果実酒ですよ。今年は特に出来がよかったので、ぜひお裾分けしたいと仰いまして」

「うわあ、ブラスさんの果実酒！？」
ほんのりとピンクに色付いた液体を見て、マァムは歓声を上げた。
実は以前、マァムはこれをご馳走になったことがある。あれは長らく行方不明だったダイが無事に地上に戻った年で(ということはもう五年も前のことになるのだ、とマァムは思った)、パプニカでの養生を経て、彼は養い親ともいえるブラスの元へ里帰りをした。レオナの献身的な介護の甲斐あって大分体力は回復していたものの、念のためにアバンの使徒のきょうだい弟子たちは、護衛のために彼に付き添った——というのは方便で、併せて皆は、それぞれの立場や身分から一時解き放たれ、冒険の旅をしていた過日に戻ったかのようにはしゃぎ、よくしゃべった。クロコダインとの再会はうれしかったし、マァムとしてはチウが元気に過ごしている姿を確認出来、
ほっとしたものである。ヒムにしつこく手合わせを求められていたヒュンケルは、少々困惑していたが。
その際にブラスがふるまってくれたのが、彼お手製の果実酒であったのだ。洗練とは程遠いものの、野生の果実の酸味を残したすっきりとした味わいのそれを、特にマァムとレオナは気に入った。あまり酒に強くないマァムではあるが、小さなグラスに一、二杯、ゆっくり時間を掛けて楽しむそれは、仲間たちとの楽しい語らいの記憶とも相まって、きらきらとしたイメージを彼女の中に残したのである。
ブラスはきっと、マァムのそんな様子を覚えていてくれたのだろう。
「いいのかしら。ブラスさんの手作りだし、そうたくさんあるわけでもないでしょう？私がこんなにもらっちゃって」
「大丈夫ですよ。昨年はね、本当に果実が豊作だったんです。島の皆だけではとても飲みきれないくらい、たくさん出来ましてね。先週にはパプニカにいるダイくんと、それからテランにいる……
えーっと、あのへなちょこ魔法使い……」
「ポップでしょ。もう、本当はちゃんと名前も覚えているくせに」
「あははは、嫌だなあ、マァムさんってば。そうそう、そのポップくんのところにもですね、ボクがわざわざ出向いて一瓶ずつ届けてやったところです」

「そうだったのね。みんなは変わらず元気かしら？」
「ええ、とても。へなちょ……ポップくんのところは、そろそろ奥さんが臨月ということで、彼はそわそわ落ち着かない様子でしたがね。あの調子でちゃんと父親になれるのか、いささか心配ではありますな」
「チウったら。意地悪を言わないの」
「あはははは。まあ、ボクを見倣って少しはどっしり構えるよう、活を入れておいてやりましたよ」
チウを嗜めはしたものの、彼が語るポップの姿を思い浮かべると、マァムも微笑まずにはいられない。チウには散々な言われようをしているが、なにしろポップは救世の大魔道士であり、戦後テランに魔法研究所を設立したひとかどの人物だ。メルルと結婚後には家庭も大事にし、よき夫であり立派な家庭人であることは疑いようもない。しかしどんなに頼もしい大人に育ったとしても、初めての我が子の誕生が間近となれば、期待と不安で心が揺れ動きもするだろう。母となるメルルの方は、なんとなく冷静さを保っているように思えるけれど。
「で、ですね。先ほど話に出たパプニカの女王さまからは、これを預かってきました」
少年時代の臆病だったポップを思い出し、あれから随分と時が流れたのだと感慨に耽っていたマァムは、三度袋をまさぐりだしたチウの言葉に反応するのがやや遅れた。
「……え？レオナから？」
「はい。近々マァムさんにも会いに行くとお話したところ、これもついでに頼むと言われましてね……えっと……」
これではまるで郵便屋である。さすがにマァムも申し訳なく思えてきたが、なんのかのと皆に頼りにされているのも、意外と懐の大きいこの空手ネズミの人徳(？)であるのかもしれない。何を託されてきたのだろう、重いものであったのならばパピラスの負担も大きかったのではと心配になってきたマァムの眼前に、しかし差し出されたのは、幸いなことに二本のキメラの翼であった。
「女王陛下から伝言です。『もうっ！執務執務の毎日で、ストレス解消しなくちゃ、やっていられないわっ！たまには遊びに来て頂

戴！』」
「！……チウ……に、似ているわ……」
「でしょう。このボクにかかれば、物真似のひとつやふたつ」
得意気に鼻をぴくぴくさせるチウの前で、マァムはひとしきりころころと笑った。今や『パプニカの白薔薇』とまで称されるようになった麗しの女王の威厳も、旧知の仲間の前では形無しだ。
とはいえ、事実レオナのストレスは相当のものだろう。魔王軍との戦いの中で、地上の国々の中でもパプニカの負ったダメージは殊に大きかった。傷付いた民と土地を励まし導き、その一方で消えた勇者を待ち続けた日々。弱音を吐くことの許されない立場にあって、彼女がどんなに努力を重ねてきたのか理解している人間は、実際のところそう多くはない。そのうちのひとりであるにも関わらず、言われてみればここ数年、マァムはあまり彼女に会いに行っていなかった。それはマァムが自身の道をまっすぐに歩んでいたためでもあるが、即位後のレオナの多忙さを鑑みて、訪問を遠慮していたためでも確かにある。聡いレオナのことだ、友のそうした心情を読み取って、こうして足を運びやすい状況をお膳立てしてくれたのだろう。
「ありがとう、チウ。せっかく移動アイテムまで用意してもらったのだし、近いうちに必ずレオナのところへ行くことにするわ。こんなにたくさんの届け物をしてくれて、あなたにも感謝している」
労いの意味も籠めて四切れ目のケーキを切り分けたマァムの手は、しかし
「いやいや、これらは全てついでに預かったもので。ボクが本当にお持ちしたかったのは、これなんですよ」
というチウの声に、ぴたりと宙で止まることとなった。
「え……まだあるの？」
「はい。これをぜひ、マァムさんに差し上げたくて」
言いながらチウは、テーブルの上に岩石の欠片のようなものをそっと置く。
「これ……」
「綺麗でしょう？先日、浜辺でトレーニングをしているときに見付けたんですよ。パオール？オルーパ？何か、そういった名前の宝石

なんですって」
言われるまでもなく、それがただの石ころではなく美しい何らかの原石を含むものであることは見て取れた。ぱっと見て判るくらいの大きさであり、ジュエリーには疎いマァムでも、それなりの価値がありそうなものと理解出来る。
「もしかして、オパールじゃない？」
「ああ、そう言えばそんな名前だったかもしれません。パプニカの女王陛下に教えてもらったんですよ」
——あら、オパールの原石じゃない。
「ボクにはこのままでも充分綺麗に思えるんですがね。女王さまが仰ることには、磨いてペンダントとか指輪にしたら素敵じゃないかって」
——ほら、角度を変えて眺めると虹色に変化して見えるでしょう？この大きさがあれば、好きなアクセサリーに加工出来そうよ。
「それを聞いて、これは女性に贈るべきものだと思いまして。すぐにマァムさんの顔が浮かんだんですよ」
実はレオナに話を聞いたチウは、その場で布を取り出し、原石を一生懸命磨いてみた。だが石はもちろん形を変えず、がっかりしていたところ、宝石を磨くには特別な技術が必要なのだと教わったのである。
——マァムにあげるの？なら、何に加工するかが決まったら、また声を掛けて頂戴。腕のいい職人を紹介するわ。
親切にそう言ってもらったものの、おかしくてたまらないといった風情で大笑いされたことはマァムには秘密だ。
「美しいものは、美しい女性にこそ似合いますからね。ささ、どうぞ遠慮なさらず。ボクからの贈り物を受け取って下さい」
言いながらチウは原石を両手で捧げ持ち、恭しくマァムに向かって差し出した。
実のところ、マァムは宝飾品の類に全く興味がない。幼いころから活発な少女であり、現在では武術を修める彼女にとっては、自らの身を飾ることより優先されるのは何より身軽さであったからである。唯一の例外は師から授けられたアバンのしるしであるが、すでに十年以上の歳月を共に過ごした今、それに関してはすでに自身の

身体の一部のように感じられていた。
であるから正直なところ、自分がアクセサリーを身につけているところは想像出来なかったのだけれど、彼女を喜ばせようと願ってくれた(のであろう)チウの気持ちは無下にしたくない。それに石自体は確かにとても穏やかに深い色合いをしていて、見ていると体内の気の流れが整ってくる心地がする。そういえば、アバンのしるしも輝聖石という貴重な石で作られているのだと聞いた。石の中には、生物の精神や肉体に良い影響を与えるものもあるのだろう。マァム同様、拳聖・ブロキーナの教えを受けたチウが、目には見えない力をこの石から感じ取っていたとしても、それは別段不思議はないことなのかもしれなかった。
「……あなたが見付けたものなのに、いいのかしらって思うけれど。でも、私のことを考えてくれる、その気持ちがうれしい。だから、ありがたくいただくわね」
手のひらで受け止めれば、石の表面はひんやりと冷たいのに、何か温かなものの気配を感じる。彼女は、それを寝室に飾っておこうと決めた。
「素敵ね。砂浜に流れ着いていたの？」
「はい。きっと、いつか美しいひとの手に渡る日を夢見て、長い長い旅をしてきたんでしょう。今こうしてマァムさんの元へやって来たのは、運命というものなのかもしれません」
ひどく気障な物言いに、マァムは思わず吹き出しそうになってしまった。けれど、チウは大真面目である。なんとか笑いを噛み殺し、
「ロマンチストね」
と返せば、チウは
「ボクは浪漫を理解する男ですからね」
と胸を張ってみせた。
「本当ね。さ、よかったらもう一切れケーキをどうぞ」
「いただきます。マァムさんに喜んでいただけたなら、ボクもそいつを見付けた甲斐がありましたよ……あ、そうだ」
にこにこしながら大きなピースを受け取ったチウは、すぐにケーキを口にしようとはせず、ことりと皿をテーブルに置いた。

「流れ着いたと言えば、もうひとつ見ていただきたいものがあったんだった」
「見てほしいもの？」
「ええ。ちょっと待って下さいね」
言いながら彼は、思い切り腕を伸ばして袋の底をまさぐった。取り出したのは――
「この瓶なんです。これも海で入手したものなんですけれど」
「これ……中身は、手紙？」
「ええ、多分」
それはうっすらと青く色付いた硝子製の瓶だった。シンプルな造りで、元は酒類が入れられていたようにも見えるが、それにしてはやや小さめで、むしろ旅人が飲み水を入れて運ぶに適したものにも思える。波に洗われたのか曇りひとつなく、その口にはコルクでしっかりと栓が為されていた。
そして中には、マァムの指摘通り、書簡のように見える厚手の紙がくるくると丸められて入っていた。
「多分って、見ていないの？」
「いえ、開けてみましたよ。ただ、ボクには読むことが出来なくて。ちょうどこちらに伺う機会がありましたから、マァムさんに読んでいただこうと」
「ああ……そうだったのね」
喋ることに関しては何ら不自由のない彼であるからうっかり失念していたが、言われてみれば、読み書きまではさすがにチウには難しかろう。納得したマァムは、ずいっとこちらに押し出された瓶をそっと受け取り眺めてみた。
「波間に漂っていたところを拾ったんです。割れる前に見付けてやれてよかった」
「中身が台無しになってしまうものね……これ、見ていいのかしら？」
「構わんのではないですか。海に流した段階で、特定の誰かに宛てたものではないのでしょうし」
「そうね……」
話に聞いたことはあった。おそらくこれは、ボトルメールと呼ばれ

るものであるのだろう。いつ、どこに着くとも知れないまま、けれど誰かに届くことを期待して流された手紙。それこそ、手にした者が運命として読んでやるべきものかもしれない。
「お願いします、マァムさん。ボクも内容が気になるので」
「解ったわ。ちょっと待って」
栓はかなりしっかり閉じられていた。だが力を込めてキュッキュッと数回捻ると、すぽんと小気味いい音を立ててコルクが抜ける。慎重に瓶を逆さまにして、マァムは中身を取り出した。
「わお！何て書いてあるんですか？やっぱり手紙ですか？」
「そうみたい……え……これって……？」
濃紺のインクでしたためられた流麗な文字に、マァムは絶句した。署名こそない。しかし彼女にとって、それは見慣れた、親しみのある筆跡のように感じられたのである。
「マァムさん？どうかしましたか？」
「いえ……ねえ、チウ。あなた、これを拾ったって言っていたわよね？誰かに渡されたわけじゃないのよね？」
「ええ。確かにボクが海で拾ったものですよ。ボクは誠実な男です。特にマァムさんに対して、嘘なんて吐くわけがないでしょう？」
「そうよね……」
チウの言う通りである。彼は自分をよく見せようと見栄を張ることはあるが、嘘を吐くことは今まで一度もなかった。まあ、勘違いや記憶違いをすることは少なくなく、結果として事実と異なる発言をしてしまうことはあるのだが。
「ねえねえ、マァムさん。そこには何て書いてあったんです？マァムさんが、そんなにびっくりするなんて」
「あ、うん……『オパールの月、四番目の日。一番星が輝くころに、この海が見える丘で待っている。お前と初めて出会った、思い出の場所で』」
「あれ？それだけですか？」
「それだけよ……え、チウ？あなた、やっぱり何かを知っているんじゃないの？」
「！……いえいえいえいえいえ！」

チウは、ぶるぶると何度も首を横に振った。併せて両手も、そして背後ではしっぽもぶるぶると揺れている。
怪しい。どう見ても様子がおかしい。
しかしマァムが追及するよりも早く、チウはカップのお茶をがぶりと飲み干し(もうすっかり冷めていたのは幸いだった)、こほんとひとつ咳払いをすると弁明を始めた。
「ほら、ボクも中身を見たって言ったじゃないですか、読めなかったけれど。結構な文字数があったように感じたのでね、もっと多くの内容が書かれているのかと、そう思っただけですよ」
「……そう」
どこか不自然だとは思うものの、そう言われては否定も難しい。
「それよりも、よく解らん文章ですねえ……オパールの月って、何だろう？その石みたいに、月が虹色に輝くってことかな？」
マァムの疑問に対する答えはこれで終わりだとばかりに、チウは話題を手紙の内容に移した。
「ああ、多分そういう意味じゃないわ。宝石にはね、一月から十二月まで、それぞれの月を守護していると言われているものがあるのよ。オパールは、十月を司る石」
「へえぇ～」
宝石類に興味がないとはいえ、その知識はマァムにもあった。ちなみに春に生まれた彼女自身の誕生石の中には、淡くて薄い紅色のものがある。かつて村の女性が婚約した際、相手から贈られたのだと大切そうに見せてくれた指輪にその石が使われていた。まるで花を溶かして固めたみたいだわ。幼かったマァムは、そう思って見とれたものだ
「なるほど。その手紙を書いた男も、なかなかに浪漫を理解する者のようですね。ボクほどじゃないですが」
「男？この手紙を書いた人を、あなたは知っているの？」
「い、いえいえ。文面からそう感じただけですよ」
再びカップを持ち上げたチウだったが、残念ながら中身は先ほど全て飲んでしまっていた。鼻先まで運んでいたカップをテーブルに戻し、チウはお代わりを所望する。
「あ～、ケーキばかりでなく、これも実に美味しいお茶です。よろ

しければ、もう一杯」
「……ちょっと待ってね」
言い置くとマァムは席を立ち、一度台所へと引っ込んだ。竈にもう一度火を起こし、やかんにたっぷりの湯を沸かし直す。ついでにポットの茶葉も新しいものに入れ替えた。
テーブルに戻ったとき、チウの皿からケーキの最後の一切れは消えていて、彼は揺れるカーテン越しに長閑な村の光景を眺めているところだった。
「ねえ、マァムさん」
振り返り、こぽこぽと音を立てて茶が注がれるのを見ながら、チウが口を開く。
「ここは本当に綺麗なところですね」
「そうね。片田舎の小さな村だけれど、緑は豊かだし皆いい人だし。私にとって、とても大切な場所だわ」
対面に腰を下ろしたマァムに礼を言い、チウはまっすぐ座り直す。
「この前、ダイくんに会ったときに聞いたんですけれどね。ダイくんとポップくんは、ここでマァムさんに出会ったんですよね」
「正確にはすぐ側の森の中でのことだったんだけれど、まあ、大体そんなところかしら」
話の筋が見えないまま、とりあえずマァムはそう相槌を打つ。自分のカップも新しい茶で満たすと、柑橘系の果物の爽やかな香りがふわりと立つ。この茶も、村人たちの手に依るものである。
「それまで互いに知らなかった者同士が仲間となり、やがてより多くの仲間を見付けて、大魔王を倒すほどの力を手に入れて。偶然だったのかもしれないけれど、でもボクにはやはり、出会う相手が誰でもよかったようには思えないんですよ。皆さんでなければならなかったというか、偶然なんかじゃなくて運命ってやつなのかもしれないな～、って」
「うん、それは解るけれど……チウ。あなた、一体何を言っているの？」
「あー、つまりですね。その綺麗な石がマァムさんの手に渡ったのも運命なら、もしかしたらこの手紙も、運命の大きな力によってマァムさんに読まれることになったのかもしれないって、ボクは思

うわけです」
なるほど、そういうことを言いたかったのかと、マァムは得心した。
少し――いや、本当は大分――無理のある話の展開であるとは思う。けれどこの手紙を運び、マァムに読ませてくれたチウの気持ちを考えると、彼女は彼を咎めることは出来なかった。
脳裏に、穏やかで微かに寂しげな目をした男性の面影が浮かぶ。幻の彼は、きりりと引き締まった唇を動かしかけ、でも結局は何も言わずに口を閉じる。呑み込まれたのは言葉だけではなくて、重くて大切な思いもであるのだと、マァムには解る。何を言おうとしたの？尋ねたくても、でも結局そう問うたことは一度もない。
もしこの手紙が、彼女の想像通りに彼の手に依るものであるなら。何処に着くかも判らない、もしかしたら誰にも存在を知られぬまま果ててしまうかもしれない儚い便りに、彼は自らの心を託したのだろうか。読んでほしい相手には、おそらく届かない。そう解っていながら、奇跡のような可能性に縋ってみたくなったのだろうか。
「きっとその瓶は、長い長い旅をしてきたんでしょうねえ」
ふうふうと息を吹きかけ冷ましていた茶が、飲みごろになったのだろうか。一口ずずずっと啜ったチウは、ほうっとため息を吐くと、どこか湿った声音で言った。
「壊れそうになっても、耐えに耐えて。いつか運命の相手の元へ流れ着けることを、ひたすらに願って。そして今、ここに在るんだって考えると、ボクはなんだか泣けてきますよ」
「……本当にロマンチストね」
「へへへ、それほどでも」
「ふふふ。でも、そうね。私もその運命を、ちょっと信じてみたくなったわ」
そう、ここにはキメラの翼が二本ある。久し振りに友の顔を見て、午後のお茶でも楽しんで。空を夕焼けが支配するころ、暇を告げよう。そしてゆっくり向かってみようか。かつてのパプニカ神殿跡地。マァムにとっても忘れられない、始まりの地へ。そこで何が待っているのか、今は判らないけれど。信じてみようか、チウの言うところの〝運命〟というものを。

「今日は色々ありがとう、チウ。ね、よかったら夕飯も食べていかない？デルムリン島の話ももっとゆっくり聞きたいわ」
「え？いいんですか？」
「もちろんよ。ちょうど今日は私が夕食作りの担当なの。老師のところにいたときによく食べた、鶏肉のスープを作るわよ」
「うわあ、あのスープ、大好きです！ボク、野菜を洗って皮を剥きますよ」
「懐かしいわね。そういえば、あのころも一緒に食事の用意をしたっけ。じゃあ、裏の畑にお芋を掘りに行きましょうか。井戸から水も汲んでおきたいし、力仕事だけれど頼りにしているわよ」
「任せて下さい！」
ぴょんと椅子から立ち上がったチウは、ぐっと力瘤をつくってみせる。自慢気に上向いたひげの先にケーキの食べかすがくっついているのを見て、マァムは笑いながらそれを取ってやった。

2

ずんずんずん！と。
足音も荒く肩を怒らせて歩を進める男の様は、王宮という場所に全く相応しくなかった。いや、実は所作以前の問題であったのだ。行き過ぎる人々の目を引き付けているのは、一匹の大ネズミの姿であったのだから。
本来であれば、魔族との大戦の中で破壊された後、何年もの時間を経てようやく再建の終わった宮殿の中にモンスターが現れたものと、城中大騒ぎになったことだろう。賢者の国であるパプニカには、魔法の優秀な使い手も多い。駆け付けた魔道士の炎に焼かれたり、あるいは兵士の剣や槍に曝される危険は充分あった。
そうした危機からチウが守られていたのは、本日ここにやって来る大ネズミが、女王陛下と王配――そして同時に救世の勇者でもある――の昔馴染みであるという知らせが事前に行き渡っていたためだ。チウが言うところの「へなちょこ魔法使い」であり前に彼の訪

問を受けていたポップが、最近開発した伝達魔法で、間もなくパプニカにもチウが行くだろう旨をダイに伝えていたのである。(もっとも、その気遣いをチウは知らない。だから残念ながら、彼の中でポップに対する評価は露ほども上昇してはいなかった)。
——うわあ、久し振りだね。
ダイは、いつの間にか随分と伸びていた上背を屈めてハグしてくれたし、
——元気そうで何よりだわ。
レオナも、にっこり笑ってチウを迎え入れてくれた。ブラスから託された果実酒を渡すと、何故か彼女はダイ以上に喜んで、
——ちょっと、一気に呑み過ぎないでよ。
と窘められていた。
懐かしい思い出話やデルムリン島の近況報告を楽しみ、そういえばとチウが宝石を取り出したのは、彼の知り合いの中でこうした知識に最も長けているのはこの女王だと考えたからだ。
——あら、素敵。それ、オパールの原石よ。
案の定、石を一目見ただけで、レオナはそう断じてくれた。ちょっと見せてね。一言断りを入れて、細い指先でためつすがめつ、石を検分する。
——大きさもすごいけれど、質もなかなかいいみたい。磨けば綺麗なアクセサリーになりそうよ。
その場で布を取り出したチウを笑いながらも、レオナは色々と役立つ情報を与えてくれた。石を磨くには特殊な技術が要ること、自分にはその職人のつてがあること。マァムが望む形が決まったら、自分が口を利いてあげようということ。
オパールという石についても、興味深い話を聞かせてくれた。
——オパールってね、他の宝石とは違う珍しい性質があって。死んだ動物の化石が長い長い時間を経て、美しく結晶したものがあるのよ。
——へえええ。じゃあこの石も、昔は何か生き物だったってことですか？
元々丸い目をますます丸く見開いて驚くチウに、レオナは優しく微笑んで教えてくれた。

——全部が全部ってわけじゃないから、この石がそうだとは言い切れないけれどね。でも、その可能性も充分あるわ。
素直にすごいと思った。昔も昔、気の遠くなるくらいにはるかな昔(と、レオナは表現した)に生きていた何者かが、時空を越えて今、自分の手の中でこんな風に輝いているなんて。
それはどんな生き物だったのだろう？強く他者の上に君臨する立場のものであったのか、それとも逆に、か弱くも健気に生きた小さき生命だったのか。
いずれにしても美しい生物だったのではないかと、チウは想像する。だってそうではないか。まるで持ち主の魂をそのまま取り出し形にしたような、この石。それがこんなにも美しいのだから、元の魂もさぞ美しいものであったのだろうし、ひいてはその魂を宿した肉体も、彼(あるいは彼女)の歩んだ生涯も、きっと美しいものであったに違いない。何の根拠もない話ではあったけれど、チウにはそう信じられてならなかった。
思ったままに口にすると、女王もさることながら、彼の言葉に大いに賛同してくれたのは王配陛下の方であった。
——それ、素敵な考え方だね。その生き物がどんな最期を迎えたのかは判らないけれど、とにかく一生懸命生きて、その結果が今を生きるオレたちに見える形で残るなんて。
ダイの言う通り、古の時代を生きた〝それ〟の終焉は、必ずしも安穏なものではなかっただろう。自分より大きな生物に食い破られてしまったのかもしれないし、食物がなくて飢え死にしたのかもしれない。怪我や病気にのたうち回って生命を終えたのかもしれない。けれど、たとえどうであったとしても、それは全力で生き抜いた結果のものであったと信じたかった。
——うふふ。案外君もロマンチストなのね、ネズミくん。
——そりゃあ、もう。ボクは浪漫を理解する男ですから。
レオナの揶揄い混じりの言葉にも堂々と胸を張って応じながら、チウは自らの生もそのようなものでありたいと、胸の内で考える。
だって、格好いいではないか。自分が全身全霊で生ききったその後も、こんな風に誰かの心をときめかせる存在であり続けられるなんて。

目線を上げれば、穏やかな笑顔を浮かべながらこちらを見ている若い夫妻の顔が見える。この人たちの魂が結晶化しても、きっと美しい宝石になるだろうなとチウは思った。アバンの使徒たちがそれぞれの魂の色を持つことは、共に大戦を生き抜いた者たちには周知の事実である。そこから想像を巡らすなら——
(レオナ女王の魂は、眩しいくらいに凛とした白色石になるのだろうな。ダイくんは青みの強い石になりそうだけれど、きっとそれは、見ているだけで気持ちが安らぐ海のような色に違いない)
急に黙りこんだチウが、まさか自分たちの死後のことを考えているなど、さすがの英傑たちも思い至らなかっただろう。彼らは物思いに沈んだ様子のチウをそっとしておいてやろうと考えたのか、茶菓子を楽しみながらふたりで静かに会話をしていた。
(もちろんマァムさんの魂は、最上級の魅力を携えた石になるはずだ。きりりとした美しさを誇りつつ、愛らしく、それでいて蠱惑的な……うーん、あのへなちょこは、認めたくはないが、まあ魔法に関してのみは一級品であるからな。もしかしたら、魔力を秘めた宝石に化ける可能性もゼロではない)
そしてチウの思いは、アバンの使徒の最後のひとりへと移っていく。
(彼は……ううーん、無愛想で面白味のない男で……ボクのようにユーモアや愛嬌があるわけでもない……まあ、戦士としては優秀だし、そこそこ知的なことは認めるが……それにあの銀色の髪がそれなりに美しいことは事実だが……ボクの毛並みほどではないにしても……うーん、うーん)
チウにとってアバンの使徒の長兄は、一言で表すなら「掴み所のない男」だ。何を考えているのかが、よく解らない。彼の弟妹弟子たちに関して言えば、マァムは言うに及ばず、ダイもポップも素直で感情表現の豊かな人物だ。レオナだけは己の立場がそうさせるのだろう、必要な状況では自身を律して個人的感情を隠しきるのはさすがであるけれども、プライベートな場で会えば、これまた情緒を理解する温かさを感じさせる女性である。
その点、あのヒュンケルという男。
冷たいわけでないことは解る。なんと言っても、あのクロコダイン

さんの認める相手だ。また、デルムリン島で一緒に暮らすヒムちゃんも、彼のことは一流の男として扱っている。彼らを敬愛しているチウにとって、その判断は信頼に値するものだ。
それに仮にもあの大戦を共に駆け抜いた関係であるから、自分の身が傷付くことも厭わず地上に生きるものたちのために戦う姿を見ていれば、彼の内に流れるものが熱いものだということなど、チウだって本当はひしひしと感じ取っているのだ。
しかしながら、だ。
どうしてだろう。あの男は、どこか全力で生ききっていないような、熱いものをあえて氷の檻に閉じ込めているようや印象を与えるのだ。その表現が不適切であるなら、何かを諦めているようなと言い換えてもいい。
殊更他者のことに関心を持つわけではないチウではあるが、周囲の会話から、ヒュンケルのかつての立場や行いについてはある程度理解している。人間の身でありながら同じ人間を攻撃し、国ひとつを壊滅状態に追いやったことに対して罪の意識を持っていることも、無理からぬこととは想像がつく。生涯を通じてその罪を購っていこうと思っているだろうことだって、直接聞いたわけでなくとも、振る舞いを見ていれば一目瞭然で解ることだ。
しかし、しかし、だ。
すでに彼は勇者と共に、世界中の人々の安寧のため、大きな貢献をしたではないか。それで過ちの全てが帳消しになるわけではないにせよ、彼が何ひとつ償いをしていないことにも、またならない。彼が背負うものはとてつもなく重いものであるのだろうが、一歩一歩贖罪を果たす中で、その重荷も少しずつ下ろされていってもいいではないか。そして明るいものに手を伸ばすことも許されるべきではないかと、チウには思えて仕方ないのだ。
解っている。本来であればチウが口出しすることではない他者の人生に、このようにもどかしさを覚え、時として――はっきり言ってしまえば――いらいらするのは、そこにチウの大切な存在が絡んでくるからだ。
あの大戦から、それなりの歳月が過ぎた。消えた勇者が戻るまでに数年、アバンの使徒たちが本当の意味で再び歩み出してからも更に

数年。
その間に、まずはあのへなちょこ魔法使いが結婚をした。相手もまた、あの命懸けの時代を一緒に戦い、与えられた生命を生き抜くために勝利をもぎ取った女性だった。数日前に会ったポップは、もうそう遠くない未来に迎え入れる新しい家族の存在をひしひしと感じている様子で、チウですら皮肉の言葉を思い付かないほどに幸せ一杯の顔をしていた。
そんな夫婦から三年遅れて、数多の障害を乗り越えて、パプニカ女王と勇者その人が結ばれた。
——王配？なんて、柄じゃないけれどね。
結婚の挨拶のためにレオナを伴いデルムリン島を訪れたダイは、照れ臭そうに笑いながらもまっすぐな瞳をして、共に育ったモンスターたち、昔の仲間、そして彼を慈しみ育てたブラスに誓ったのだった。
——それでも、おれはおれに出来ることを頑張るよ。レオナのためにも、地上に生きるみんなのためにもね。
と。
けれど、弟妹弟子たちが次々と新しい道を見出だす中で、マァムは不自然なくらいに生活を変えていない。
いや、ロモス王家を筆頭にパプニカやカールの要請を受け、彼女があちらこちらの福祉施設や医療の現場で活躍していることはチウも知っている。その仕事にやりがいを覚え、誇りを持って生き生きと取り組んでいることだって理解している。人間社会のことはよく解らないけれど、結婚して家庭を築くことだけが幸せではないと皆が言うし、チウだって、マァムが心底満たされて生きてくれているならそれでいい。非常に無念なことではあるが、チウ自身がマァムの伴侶となり彼女の隣で生きていくことは大分前に断念した。愛の前では種族の違いなんて、とは今でも思うことだけれども、大事な女性をわざわざ困難な道に引きずり込むことを彼は是とは出来なかったのだ。
そして何より、それ以上に。
チウは気が付いてしまったのだ——誰にでも優しいマァムが、ただひとりの人物に対してのみ、慈愛だけではない熱の籠った眼差しを

向けていることに。
ああ、マァムさんは、あの男のことが本当に好きなのだな。認めることはつらかったけれど、自分が誰より思慕する相手の選択を否定するなど、獣王としての矜持が許さない。呑めもしない酒を樽ごと呑んで、一晩中泣いて、(そしてクロコダインに介抱されて)、チウはきっぱりとこの恋心に区切りをつけた。
——愛する女性の幸せを願わずして、何が男だあぁ~っ！
あの夜のこと、特に後半のことはほとんど記憶に残っていないけれど、クロコダインに背中を擦られながら眺めた朝焼けの美しさだけは、今もくっきり胸に刻まれている。
だから、ヒュンケルを見ていると、時々我慢が出来ないくらい腹が立ってくるのだ。
あのマァムさんに想われながら。意気地なく立ち止まったままで、彼女まで巻き込んで。きっとマァムさんは、彼のせいじゃないわと言うだろうけれど。私は、私の意思でこうして生きているのよ、と。
でもそれなら、たまに彼女が見せる寂しそうな笑顔は何なのか。彼女の名前を耳にするたび、目を伏せるヒュンケルの癖に誰も気付いていないと思っているのか。
——……気に入らーーーん！
突然大声を上げて、だん！とテーブルを叩いたチウを、さすがの勇者と一国の王も驚いて見つめた。
——ど、どうしたの？
——ほら、やっぱりネズミくんは魚よりもお肉の方がいいのよ。それをダイくんったら、浜辺でバーベキューがしたいからって、海産物ばかり推しているから。
——そ、そうか。でもさ、お城の中で窮屈な思いをしながらごはんを食べるより、島での食事みたいに気楽に食べた方が楽しいかなって思ったんだ。ここには幸いにもプライベートビーチもあるしね。
——へっ？……あ、いやいや……そういうことではなくてですね……
どうやらチウが考え事をしている間に、夫妻は今夜の夕食について話し合っていたものらしい。そういえば先ほどから、ちらほらとそ

れらしい会話が聞こえていた気がする。(『せっかくだから、島の話をもっと聞かせてよ。帰りはオレが瞬間移動呪文で送るから、ゆっくりしていっても大丈夫でしょ？』。チウは生返事をしていたのだ)。
——いきなりすみませんでした。夕食はぜひご一緒させていただきたいですし、ボクには好き嫌いはないから、メニューは何でも大丈夫ですよ。厚かましいお願いですが、もしよろしければパピィのために少しばかり生肉もいただけるとありがたいのですが。
慌てて取り繕えば、ふたりはまだ少々怪訝そうではあったものの、それ以上深くは追及せずに済ませてくれた。
——あー、それでは夕食の時間まで、後学のためにもお城の見学をさせていただこうかな……ときに、アバンの使徒の長兄殿はこちらに滞在中ですか？
ヒュンケルもマァム同様、カールやパプニカ王家からの要請で動くことが多いと知っていた。極力さりげなく尋ねれば、チウの狙い通り、ヒュンケルは数日前に、パプニカに戻ってきたところだという。
——多分、この時間なら兵士の訓練を見てくれているのじゃないかしら。
レオナの言葉に、チウは丁寧に礼を述べた。
そして彼は今、ヒュンケルの元へと歩を進めている。ずんずんずん！と、勢いよく。

3

今日は波が高い。それでも荒れた海という印象を与えないのは、きっと晴れ渡った空から注ぐ陽光で、水面がきらきらと輝いているためだろう。強風は確かに大波をつくりもしたけれど、同時に上空の雲もすっかり追い払ってくれていた。
ヒュンケルは、この国の海が好きだ。温暖な気候のパプニカで、大抵の場合、海は穏やかな顔を見せてくれる。それは、眺めているだ

けで心が静かに凪ぐ光景だ。
今日のようにやや激しい動きを見せる波も、この惑星の鼓動を感じさせるようで美しい。厚い雲が垂れ込めるどんよりと暗い午後でさえ、風と寒さに抗う鳥の姿に、己の何かが励まされる気がする。
そんなヒュンケルだから、訳も解らず砂浜に誘い出されたことを迷惑にも思わなかったし、苛立ちひとつ覚えてもいなかった。
だが、隣に立つ男は違うらしい。全身の毛を心なしか逆立てて、負の感情を発散させている。
——ちょっと付き合いたまえ。君に話がある。
そう言いながらチウが現れたとき、ヒュンケルはパプニカ衛兵たちに剣を指南しているところだった。彼自身はパプニカに籍を置いているわけではないのだが、レオナやダイ、そしてダイに仕えるラーハルトから声が掛かれば、しばしば王宮を訪れる。そしてそのときに請われれば、兵に稽古をつけることもままあることだった。
今日の訓練が一区切りついたところであったのは、幸いといえば幸いだった。こちらの都合などお構いなしに乗り込んできた(と思しき)かつての仲間に一瞬驚いた顔を見せたものの、ヒュンケルはすぐにその場を退出してチウの先導に従った。そして連れて来られたのが、パプニカ城下町から少し離れた浜辺だったのである。
威勢良く前を歩いていたチウが、ぴたりと歩みを止めた。
「……ヒュンケルくん」
低く発せられた第一声は少々剣呑な空気を漂わせ、はて、自分は何かこの大ネズミを怒らせるような真似をしでかしただろうかと、ヒュンケルは自問する。しかし怒らせるも何も、日頃はほぼ接点のないふたりであるのだ。とりあえずヒュンケルは、もうしばらく相手の出方を窺うことにした。
「……何だ？」
一言で返事をすれば、チウはふうーっと大きく深呼吸し、くるりとこちらを振り返る。
「これを見てくれたまえ」
その手には、いつの間に取り出されていたのだろう、手のひら大の石がひとつ握られていた。
「これは？」

「この前、ボクがデルムリン島で拾ったものだ。先ほどレオナ女王に確認したところ、パオールという名前の宝石らしい」
聞いたことがないなとヒュンケルは思う。彼は、師のアバンほどではないにせよ結構な読書家であり、職業上の必要もあって地質学にも多少は通じていた。その関連で貴石の類についても目にしたことはあったのだが、チウが口にした名前には心当たりがない。
「なるほど。言われてみれば確かに美しい石だ……それで？どうしてそれをオレに見せたいなどと思ったんだ？」
「フフン、アバン様の一番弟子である君は、なかなかの知性の持ち主であり博学であると評価していたんだよ。だが、この石を見てそれしか感想が出てこないとなると、君もまだまだ修行が必要なようだね。へなちょこな弟弟子くんとそう変わらない」
何故このように挑発されるのかは解らなかったものの、ヒュンケルは小さく肩を竦めるだけで、暴言とも取れるチウの発言を受け流した。
「まあ、確かに自己を研鑽するのに終わりというものはないがな」
「ふむ、いい心掛けだ。ではそんな君に、ボクがこの石に関する知識を伝授してあげよう——そもそも宝石というものはどのように出来上がるのか、君は知っているかね？」
高飛車な態度が多少気にならないでもないが、話の内容は決して不快なものでもなさそうだ。やや警戒を解いたヒュンケルは、チウの問いに対して素直に自らの知るところを述べる。
「そうした方面に関しては詳しくないが、マグマが化合したり、岩が熱や圧力を受けて変質するものと読んだ記憶がある」
「ほ、ほう？な、なかなかよく知っているようじゃないか。しかし、この石をその辺の宝石と一緒にしてもらっちゃ困るな」
何故か若干勢いをなくしかけたように見えたチウは、しかし自身を鼓舞するかのようにふんぞり返ると、手にした宝石を高く頭上に掲げてみせた。
「このオルーパはだね、なんと生物の化石から生まれたものなのだよ！」
「ほう」
「どうだい。この石がかつてはこの地上に生きていたものだと考え

ると、ますます綺麗に見えてくるとは思わないかね？」
全くもって科学的な話ではなかったものの、ヒュンケルにはチウの言う意味が解る気もした。目の前の輝きは何者かが遺した生命の残痕と言われれば、不思議なことにその煌めきがぬくもりのあるものに感じられてくる。
「ボクはね、思ったんだよ。自分が死んだ後、もしかしたら何億年もの時間を掛けて誰かを感動させる存在になれるなんて、すごいことじゃないかって。
だってそうだろう？そんなに永い時間をひとりぼっちで過ごすのは、我々の想像もつかないくらいに寂しいことだと思うんだよ。それでもそれを乗り越えて未来に生きる者の心を照らすくらいなんだ。きっとその化石になった生き物は、全力で生涯を生ききった、さぞかし美しい魂の持ち主だったに違いない」
「……随分とロマンチストなんだな」
思いがけず揶揄するような返答になってしまったのは、皮肉や嫌味を言いたかったからではない。むしろヒュンケルは、自分でも意外なほどにチウの言葉に衝撃を受けていた。
脳裏には、はるか古の時代に生きたものが、最後の力を失して横たわり、やがて朽ちて骨だけになっていく姿が浮かんでいた。時を経て砂に埋もれた彼(あるいは彼女)は、気の遠くなる孤独に耐え、今こうして目の前で輝きを放っている。チウの言い回しは大仰なものにも聞こえるが、実は真実をずばりと突いたものでもあるのかもしれない。そう思うと瞬時に身体の奥底から湧き上がる熱いものが胸を一杯に満たし、ヒュンケルは他の言葉を見付けることが出来なくなってしまった。
チウは、腹を立てなかったばかりか、むしろ堂々と胸を張ってみせた。
「当たり前だ。ボクは、浪漫を理解する男なんだぞ」
尊大なほどに背を反らせたチウを見て、この男に二代目獣王の座を任せたクロコダインの判断は正しかったのかもしれないと、ぼんやりヒュンケルは考える。尊敬する武人であるクロコダインが一介の大ネズミに獣王の笛を譲ったと聞いたときには、一体何を血迷ったものかと密かに呆れもしたものだったが、実は見る目がなかったの

は自分の方であったかもしれない。器の大きさというものは、胸に抱く世界の大きさで決まるのだということを、ヒュンケルは久方振りに思い出させてもらった気がした。
そんな物思いに耽っていたものだから、次にチウから繰り出される攻撃に対して、彼は完全に油断していたのだ。
「ヒュンケルくん。君は、精一杯生きているかね？」
「……えっ？」
「君は、今生を全力で生きているかと聞いているんだよ。いつかは我々も死ぬ。そのときに、ひとつも悔いが残らない生き方をしていると、君はこの石に誓えるかね？」
咄嗟には返す言葉を見付けられなかったヒュンケルに、チウは、
「悪いが、ボクには必ずしもそうとは言い切れない気がするのだ」と言い放った。
「それは……」
「無礼かね？侮辱と感じるかね？ああ、無礼だろうし侮辱だろうさ。この不作法に対する咎めは甘んじて受けよう。
しかしだ。無礼や侮辱に怒ることは出来ても、君は『違う』という一言を発することだけは出来ない。そうじゃないのか？」
無言を貫いたままのヒュンケルではあった。けれど我知らず大きく見開いた切れ長の目が、彼の内心を饒舌に語ってしまっていたのだろう。チウは大きく頷き独り合点すると、やや声のトーンを落として続ける。
「あの大戦の後、傷付いた身体に鞭打って消えた勇者を探したこと。ダイくんが戻ってからは、パプニカやカールからの依頼を受けてあちらこちらを飛び回っていること。それらは全て、地上の平和に尽くそうと願う君の姿勢の表れであると、勝手ながらボクは思っている。
でもその一方で君は、君自身の心に深く根付く想いに蓋をして、まるでそんなものはなかったかのように振る舞っているじゃないか。
『そんなことはない』なんて言うなよ。ボクの目は節穴じゃないんたぞ。ましてや、大切なひとに絡む問題だ、ボクだってこの上なく真剣で、慎重に注意深く観察してきたに決まっている」
「チウ……」

「なあ、ヒュンケルくん」
そこでチウはふと黙りこむと、手の中の石をじっと見つめた。空から降り注ぐ柔らかな陽光が彼の被毛をふんわりと包み、輪郭をぼやかしている。
「聞いたことがあるかもしれないが、ボクも昔、散々悪さをしていた時期がある。根城の近くの村人たちからは、随分と忌み嫌われていてね。あるときブロキーナ老師に打ちのめされた後、言葉や武術を教えてもらうようになって、今のボクに繋がってきたというわけなんだ」
手元から視線を上げぬまま、チウはぼそりと
「誰にでも過ちはある」
と呟いた。その声の小ささには不釣り合いな、重い響きを伴わせて。
「それでもね、過去をやり直すことは誰にも出来ない。みんな、前を向いて生きていくことしか出来ないんだよ。
だからボクは、償いは償いとして、自分で守れるものは全て守れるようになりたいし、この手で掴めるものは全部掴み取りたいって思うんだ。
そして、それはボクだけの権利じゃない。君にもダイくんにもレオナ女王にも、それからついでにあのへな……ポップくん、あと当然マァムさんにもだね。そして言うまでもなく君にも、だ。全力で生涯を駆け抜けることは、皆に許された権利ではないのかな」
ここにきてヒュンケルには、ようやくチウの意図するところが見えてきた。最初は、もしや喧嘩を売られているのかと疑いもしたのだが、どうやらチウは、大変に不器用な方法でアバンの使徒の長兄を励まそうとしているらしい。
もちろんそこには、ヒュンケルに対する思いやりや忸怩たる思いの他に、より大きな感情が存在しているはずである。『大切なひとに絡む問題』。その言葉が誰のことを指しているのかは明白であるように思えた。そしてそれをすとんと素直に受け入れられるあたり、顔の熱くなる思いではあるが、チウの指摘は的を射ており、ヒュンケルが秘めたつもりでいた恋慕の念は隠しきれなく滲み出てしまっていたということなのだろう。

「しかし」
それでも否定的な言葉から入ってしまうのは、悪癖とも言えるし、もはやヒュンケルの習い性でもあった。
しかし。オレのような罪人が。幸福を夢みることなど、赦されてはならない咎人が。
発しかけた言葉は、ぐいと突き出されたチウの手のひらに阻まれた。
「君の言いたいことなど、このボクにはお見通しだ――だからヒュンケルくん。ひとつ、賭けをしてみないかね？」
「賭け？」
思いがけない単語に、これまた目を見開いて問い返せば、チウは鷹揚に頷いて懐から丈夫そうな紙とペンを取り出した。
「いいかね。君は今からこの紙に、一番伝えたいひとに一番伝えたいことを書くんだ。そして」
半ば強制的にそれらをヒュンケルに押し付けると、再び懐に手をやり、ごそごそと何かを探す。
「どこにやったかな……先週、島で拾って確かここに……あれ？置いてきたんだっけ？……いや、そんなはずは……」
ぶつぶつ呟くチウを眺めて、彼の武道着の中は一体どうなっているのかとヒュンケルは訝しく思ったが、そう尋ねてよいものやら迷ううちに、チウは
「あった！」
と、求めていたものを探し当てた。
「そして君は書き上げた手紙をこれに入れてだね、海に流すというわけだ」
誇らしげにチウが示したのは、青みがかった瓶だった。やや厚みのある硝子で出来たそれは、特に凝った意匠もないシンプルな造りのもので、よく見れば表面には幾つかの痕がうっすらとついている。拾ったものだと先ほど言っていたから、おそらくはチウが手にする前には大海原を漂っていたのだろう。なるほど、そこから手紙を海に流すという発想を得たものと推察出来た。
「なにしろ波任せだ。君の言葉が届けたい相手の元へ辿り着くかどうかは、完全に運次第ということになる。いや、普通に考えれば、

途中で割れてなくなってしまうか、無事に誰かに拾われたとしても、それが望む相手ではない可能性の方がはるかに高いだろう。伝えたいたったひとりの手に渡るなんて、それこそこの砂浜から一粒きりの金の砂を見付けるに等しく難しいことだ」
「それはそうだろうな」
「だろう？そう思えば、君も少しは気楽に本音が書けるってものじゃないか？
だから、賭けというわけさ。ものすごく分の悪い賭けだけれど……でも逆に、君の言葉が奇跡的に相手に届いたとしたなら、そのときは、その運命にどーんと身を預けてみるがいい。どうだね？」
どうやらこの大ネズミは、本格的なロマンチストであるようだ。自慢げに鼻をぴくぴくさせているチウを見て、ヒュンケルは不覚にも感動を覚える。
ここでチウの言う通りに文言を記せば、おそらく彼はそれをマァムの元へと運ぶのだろう。彼の目論見は完全に看破されているのだけれど、こんな無茶苦茶な方法で以てでもヒュンケルを明るい未来へ引きずり出そうとしてくれる思いは本物だ。ひいてはこの行為がマァムのためになると信じてのことではあろうが、その真偽はともかくとして、こんなにも必死な気持ちを踏みにじる気にはとてもなれない。
どうすればいい？どうすることが正しいのか？
自分が信じて選択した生き方が、実はマァムの道も強引に捻じ曲げ、彼女の未来を狭めてしまっているのかもしれないと、薄々気付いてはいた。その不安は年を追うごとに大きくなり、本当にこれでよかったのかと悩む幾つもの夜は、彼から眠りの安らぎを遠ざける。
出会ったころには瑞々しい少女の面影を残していたマァムも、今や立派な大人である。レオナの結婚、メルルの懐妊。青春時代を共に駆け抜けた友が女性としての幸福を手にしたとき、マァムは一片の陰も見せることなく笑顔で彼女らを祝福していた。
時として、パプニカやカールから要請された仕事に彼女と同道することがある。行く先々で幼い子どもと触れ合うたびにマァムが見せる、花が開くような笑顔。間違いなく子ども好きであろう彼女が、

母となる日を夢見たことがないとは思えない。
それでもマァムは、もう何年も生き方を変えていない。生まれ故郷の小さな村にだって、気心の知れた男友達のひとりやふたりはいるだろう。仮にその中に生涯を共にしたいと思える相手がいなかったとしても、実は世界中の有力者から次々と縁談が持ち込まれていたことだって、ヒュンケルは風の噂に知っていた。そうした情報を得るにつけ、彼は常に瞳を伏せ、自分には関係のないことだと、波立つ心をやり過ごしてきたのだった。
もしかしたら、彼女は自分を待ってくれているのだろうか。都合のよい妄想だ、ただの願望だと思おうとしても、身体の奥底で吹き荒ぶ嵐は決して言うことを聞いてくれない。
——みんな、前を向いて生きていくことしか出来ないんだよ。
許されていいのだろうか？こんな自分でも、未来を見て歩いていくことを。
思い悩むヒュンケルの視界の隅で、そのとき、チウが手にした宝石がきらりと眩く輝いた。
——きっとその化石になった生き物は、全力で生涯を生ききった、さぞかし美しい魂の持ち主だったに違いない。
すとんと胸に落ちるものがあった。
本当は、ずっとずっと告げたかった。初めて彼女に逢った日から、訳も解らず惹かれていたこと。暗く冷たく閉ざされていた心にくれた光とぬくもりが、どんなにうれしかったかということ。背負った荷の重さに倒れそうなとき、あるいは進む道さえ判らず立ちすくむとき、彼女に恥じぬ生き方をしようと思えば、歯を食いしばって歩き出すことが出来たこと。許されないと我が身を遠ざけながらも、魂に刻まれた優しい名前ばかりはどうしても忘れられなどしなかったこと。
そうした全てから目を逸らしてきた数年間は、確かにチウの言う通りどこかに諦念を抱えたもので、全力で生きたと胸を張れるものではあり得なかった。そして同時にそれは、マァムからも〝悔いを残さない生き方〟を奪うものであったのかもしれない。この段に至り、ようやくヒュンケルはそう認めることが出来たのである。
今、目の前の小さき者が一生懸命に知恵を絞りヒュンケルに向き

合ってくれた、そのひたむきさと誠実さに応えようと思うなら、彼もまた、ひたむきかつ誠実であるしかない。瓶を流すことはそのままマァムへ想いを告げることにはならないだろうが、この行為をきっかけに、これまでその存在を打ち消そうとしてきた道へと歩き出す勇気を得なくてはならないのだと、ヒュンケルは悟った。
ひとつ大きな息を吐くと、彼は渡された紙にさらさらと短い文章を綴った。
「……書いたぞ」
「うん。では、これに」
ペンを持ち主へ返却するのと引き換えに、青いボトルがヒュンケルの手へと渡された。小脇にそれを挟んで、書簡をくるくると丸める。そのまま瓶に落としこむと、まるであつらえたかのようにぴったりと、手紙はその中に収まった。
「封はどうするんだ？」
問えば、チウは新しく見えるコルク栓を差し出す。結局はマァムに手渡す心積もりであるだろうに、随分と手の込んだ真似をするものだ。チウはそれだけ自分の思い付きに心酔し、それらしく事を為したかったということなのだろう。ヒュンケルは、もう質問も挟まず逆らうこともせず、黙って瓶を封緘した。
「よし。では、それを思い切り沖に向かって投げたまえ」
だから一連の作業を見届けたチウにそう言われたとき、顔にこそ出しはしなかったものの、ヒュンケルは驚いたのだ。まさかこのロマンチストは、運命の波が本当にふたりの人間を繋いでくれるものと信じているのか。
「え？」
「何を呆けているんだね。ほら、用意が出来たなら、さっさと瓶を海に流すんだ」
「……いいのか？」
「いいも悪いも、そのための準備だったろう」
「……解った」
そう、大切なのはこの手紙自体ではない。彼が彼女に向き合う覚悟を固めたという、そのことこそが重要なのだ。
会いに行こう。誰より大切で、愛しいひとに。

決意した瞬間、ふっと身体が軽くなった気がした。するとヒュンケルの腕は伸びやかに動き、手の中のボトルは美しい放物線を描いて白波の狭間へと宙を舞う。
ばしゃん。
「えっ……うわわわわっ！」
突如上がったすっとんきょうな声に隣を見遣る。するとそこには、止める間もなく海へと身を踊らせるチウの姿があった。
「チウ！？」
そもそも大ネズミが泳げるものなのかどうかの知識はなかったけれど、少なくともチウに関して言えば、決して泳ぎは得意ではないのだろう。ばしゃばしゃと水を掻く様子は不格好で、時折頭まで波を被ってしまっている。率直に言って、溺れる一歩手前の状態である。
服が濡れることなど、構っている場合ではない。チウを追って、ヒュンケルは海に飛び込んだ。

「げっ、ほっ！ぐえっ、げほっげほっ、げっほっ！」
ようやく浜辺に戻ったときには、チウもヒュンケルも全身ずぶ濡れだった。座り込んで荒い息を吐くヒュンケルの横で、チウはこれ以上ないくらいに盛大にむせている。どうやら、かなり水も飲んでしまったものらしい。海水ばかりでなく、涙やよだれ、そしておそらくは鼻水も彼の顔をぐしょぐしょに汚していた。
なんとも惨めな有り様ではあった。しかしその手には、しっかりとその代償――青い硝子瓶が握られている。
「さ、さすが……一戦を退いたとは言っても、一流の、せっ、戦士だな。す、すごい力だ」
チウがここまで思い切った行動に出ると思っていなかったヒュンケルにしてみれば、本当にすっきりとした心持ちで迷いなく瓶を投げただけのことなのだが、目の前でぼろぼろと涙を流しながら苦しそうに呼吸している姿を見れば、自分に配慮がなかったものかと罪悪感や申し訳なさにも襲われる。だが気まずそうに眉を寄せるヒュンケルに対して、チウの方は含むものは一切なく、ただ淡々と思うところを述べただけであるようだった。

「すまなかった。まさか、お前が瓶を拾いに飛び込むとは思わなかったから——」
「今！今、何と言ったかね！？」
涙目を向けながらも、ヒュンケルの言葉に被せるようにしてチウが叫ぶ。質問の意図は全く読めなかったけれど、負い目のあるヒュンケルは従順にその問いに答えた。
「飛び込むとは思わなかったと——」
「違う、違う！その前だ！」
「その前……？ああ、お前が瓶を拾いに——」
「その通りだっ！」
触れあえるほど近くにいるのだから、そんなに大声を出す必要はないにも関わらず、チウは声を張り上げて主張した。
「君も見ていただろう？この瓶は、ボクが海で拾ったものだ！君から預かったものじゃない。ボクが海で見付けて、自分で手にしたものなんだ！」
「まさか……お前……」
この大ネズミは、ただそれだけのために揺れる波浪に身を預けたのか。
『これはね、ボクが海で拾ったものなんですよ』
マァムを前にひげをぴくぴくさせながら語る、そんな彼の自慢気な顔が目に浮かぶ。
『この瓶がマァムさんの手に渡ったのは、きっと運命なんですよ。だからマァムさん、何も怖がらずに運命に身を委ねてみてもいいんじゃないですか』
「〝あいつ〟に嘘を吐かないために……？」
「フン。君の言う〝あいつ〟とは誰のことなのか、ボクには全く心当たりがないが」
ずぶ濡れのまま砂浜を転がった大ネズミは、すでに全身どろどろの砂まみれだった。その姿は客観的に見れば、決して美しいものではなかっただろう。けれど。
「そ、それにだね……げほっ！」
再度大きくむせたチウは、ぜえぜえと雑音交じりの呼吸を繰り返しながら、にやりと笑ってヒュンケルを見つめる。こちらに向けられ

た双眸に宿る輝きが、胸をずしんと射るほどに澄んで綺麗なものであることに、このときヒュンケルは遅ればせながら気が付いた。
「そもそもボクは、嘘などひとつも言う必要がない。この瓶は実際に長い間、海を漂ってきたものだし、それに君の言葉だって……
ずっと届けられるべき相手を探して、彷徨い続けていたものじゃないか。何年も、何年も。
もうそろそろ、誰かの元に届いてもいい頃合いだろう？安心したまえ、この獣王がそう保証する！この……」
ああ。彼の魂はきっといつか、誰かを勇気づける美しい宝石へと結晶するのだろう。
ヒュンケルを襲った感情の高波を知っていたのか、いなかったのか。言葉をなくした彼の前で、チウはがばりと立ち上がると胸を張り、空に向かって高らかに吼えた。
「この、誰よりも浪漫を理解する男が！そして、この海のように大きく深い心を持つ、どこまでも誠実な男があっ！」

終